

## 和泉式部と清少納言

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見え侍るめり。歌は、いとをかしきこと。ものおぼえ、歌の理、まことの歌詠みざまにこそ侍らざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしきひとふしの、目にとまる詠み添へ侍り。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりゐたらむは、いでやさまで心は得じ、口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすちに侍るか。恥づかしげの歌詠みやとはおぼえ侍らず。

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしたち、真名書きちらして侍るほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異ならむと思ひ好める人は、かならず見劣りし、行く末うたてのみ侍れば、艶になりぬる人は、いとすごうすずろなる折も、ものあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人の果て、いかでかはよく侍らむ。

【口語訳】

和泉式部という人は、実に面白く手紙のやりとりをした人だ。けれども、和泉には感心しない面がある。気楽に手紙の走り書きをした際には、その方面の才能のある人で、ちよつとした言葉の魅力も見られるようです。歌は、たいそう趣深いことだ。古歌についての知識や、歌作の理論は、本当の歌人ではないようですが、口にまかせて詠んだ歌には、必ず面白い一点で、注目されるものが詠み添えられています。それほどの歌人でさえ、他人が詠んだような歌を、非難し批評しているようなのは、いやそれほどまでは和歌の心得があるわけではない、口について次々と自然に歌が詠めてくるのだらうと、感じられる作風の人の人ですよ。こちらが恥ずかしくなるほどの立派な歌人だなあとは思われません。

清少納言は、実に得意顔で偉そうにしていた人です。あれほど利口ぶって、漢字を書き散らしております程度も、よく見ると、まだあまり十分ではないことが多いのです。このように、他人より格別優れていたかと思ひ（そのように）好んで振る舞っている人は、必ず見劣りして、ゆくゆくは悪くばかりなっていくのですから、風流ぶることが身につけてしまった人は、たいそうもの寂しく取るに足らない時にも、しみじみと感動しているように振る舞い、趣のあることも見逃さないようにしているうちに、自然とそうあるべきではない浮薄な態度にもなるのでしよう。その浮薄になった人の行く末が、どうしてよいことがありますようか（、よいはずはありません）。